別添様式

29-4	新潟県立加茂農林高等学校

平成３０年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール研究実施報告（第２年次）（概要）

１　研究開発課題名

ＨＳＪ(Hop Step Jump)カリキュラムによる自立型地域リーダーの育成
～協働的課題解決能力と自己教育力を兼ね備え、自ら未来を切り拓く人づくり～

２　研究の概要

・１学年の「総合的な学習の時間」で、①課題解決能力、②協働性の力、③自己教育力を育むためのレディネス形成を行い、習得した技術や態度を「課題研究」の取組や進路実現につなげていく。
・外部連携を①インプット型（先端技術講習会、講演会、現場見学会等）、②トレーニング型（インターンシップ、大学生による「課題研究」指導等）、③アウトプット型（継続型農業体験講座「アグリ・スタディ・ツアー」の企画・運営、地域イベント参加等）に分類し、実施する。
・中核的生徒（ＦＳ）を海外研修、地域活動等で育成し、ＦＳの学びを他の生徒にも波及させて、農業教育全体のレベルを高める。
・事業評価を、農業系関連産業への就職者数、農業系大学進学者数、アグリマイスター顕彰制度認定者数の増加や、プロジェクト活動による地域貢献度、各種アンケート等から多面的に行う。

３　平成３０年度実施規模

ＨＯＰの内容は１学年全体で実施し、ＳＴＥＰとＪＵＭＰの内容は全校で実施した。

４　研究内容

○研究計画（指定期間満了まで。５年指定校は５年次まで記載。）

第１年次	**ＨＯＰ：学びのレディネス** 本研究の「目指す人物像」に備わった協働的課題解決能力と自己教育力を、課題解決能力、協働性の力、自己教育力の３つに分類し、その力を育むために必要なレディネスを１学年の「総合的な学習の時間」で習得させるように研究を進める。 【研究事項】 ア）自ら目的・目標を設定して課題解決能力を発揮するための研究（課題解決能力） イ）多様な他者と協働的な取組を行うための研究（協働性の力） ・１学年の「総合的な学習の時間」において「学び方ガイドブック」を活用し、スケジュール管理する力を養う。 ・「学び方ガイドブック」に記載されている「夢・目標達成シート」、「日誌」等を記入することでＲＰＤＣＡサイクルを意識させ、目標達成に向け常に思考し、忍耐強く行動する力等を育成する。 ウ）自己教育力を育むための研究　（自己教育力） ・性格分析のエゴグラムから自分の対人関係の特徴を捉え、他者をサポートする際に自己理解が必要なことを学び、活用できる力を身につけさせる。 **ＳＴＥＰ：多様な力を育てる多様な学習** ア）全教科で取り組む「主体的・対話的で深い学び」に関する研究 ・１年の各教科・科目におけるシラバス、評価規準等を作成する。 ・アクティブ・ラーニング室を設置し、使用方法を確立する。 イ）農業の専門性を高めるコース間の連携に関する研究 ・次年度以降、各コース間同士の学びに深まりが出るように専門性を高める。 ウ）機能別に体系化した外部機関連携に関する研究

	・インプット型、トレーニング型、アウトプット型の連携先の検討及び確保 ・学校設定科目「加茂学」の導入等検討 エ）中核的生徒（ＦＳ）に関する研究 ・ＦＳの募集、シンガポール研修の企画・立案、研修の実施等 オ）自己教育力の発揮に関する研究 ・アグリマイスター顕彰制度に関する取得ポイント確認のシステムづくり等。 カ）多様な学習成果の評価手法に関する研究 ・各教科・科目で「目指す人物像」から評価規準を作成し、各単元別に、観点別評価に用いるルーブリックを作成する。 **ＪＵＭＰ：学びの集大成** ア）外部機関と連携した協働的課題解決学習に関する研究 ・平成 30 年度の２学年「課題研究」に関する指導方法について研究 イ）「課題研究」の取組と関連させたキャリア教育に関する研究 ・平成 30 年度の進路サポート（Ｔ－Ｔ）体制の検討・準備 **広報・普及・技術共有** ・文化祭やホームページ等を活用したＳＰＨ事業の広報
第２年次	**ＨＯＰ：学びのレディネス形成** ・前年度の反省・評価・改善を踏まえ１学年「総合的な学習の時間」の実践 ・生命情報コース２学年の「総合的な学習の時間」授業実践（１年目） **ＳＴＥＰ：多様な力を育てる多様な学習** 〈主体的・対話的で深い学び〉 ・２学年の各教科・科目におけるシラバス、評価規準等の作成 ・１学年のシラバス、ルーブリック等の見直し、改善に基づく実践と評価 〈機能別・外部機関連携〉 ・外部機関連携活動の本格的な開始、コース間連携の試行的取組 ・現場見学会、最新技術講習会の実施 〈ＦＳ〉 ・２学年のＦＳによる校内成果発表会や県外視察の実施、研修成果を踏まえた「課題研究」の取組 〈自己教育力〉 ・各種の資格取得（Ａ区分、Ｂ区分）とアグリマイスターの指導体制の確立 **ＪＵＭＰ：学びの集大成** ・「課題研究ノート」とポートフォリオの試験的運用（1 年目） ・担任とコース担当者による進路サポート（Ｔ－Ｔ）のシステムの開始 **広報・普及・技術共有** ・文化祭やホームページ等を活用したＳＰＨ事業の広報 ・全国産業教育フェア等を活用した、研究の進捗状況の報告・発表 ・授業互見週間（外部へ案内し視察者の受入）
第３年次	**ＨＯＰ：学びのレディネス形成** ・これまでの反省・評価・改善を踏まえ「学び方ガイドブック」の完成 ・生命情報コース３学年の授業実践と進路指導（１年目） ・「総合的な学習の時間」「総合的な探究の時間」の指導技術などの反省・評価・改善 **ＳＴＥＰ：多様な力を育てる多様な学習** 〈主体的・対話的で深い学び〉 ・３学年の各教科・科目におけるシラバス、評価規準等の作成 ・１～２学年のシラバス、ルーブリック等の見直し、改善に基づく実践と評価

	〈機能別・外部機関連携〉 ・外部機関連携活動の運用、コース間連携・現場見学会・最新技術講習会・大学からの出前授業の実施。平成 30 年度入学生のインターンシップの実施。 〈ＦＳ〉 ・３学年のＦＳによるチャレンジセミナー（進学講習）のピア・サポート活動 ・研修成果を踏まえた「課題研究」の取組 〈自己教育力〉 ・各種の資格取得（Ａ区分、Ｂ区分）とアグリマイスターの指導体制の確立 **ＪＵＭＰ：学びの集大成** ・「課題研究ノート」とポートフォリオの運用 ・担任とコース担当者による進路サポート（Ｔ－Ｔ）の３学年進路指導 **広報・普及・技術共有** ・平成 31 年度の全国産業教育フェア新潟大会における成果発表 ・各種技術のマニュアル化（テキスト化）による安定的・継続的取組の準備

〇教育課程上の特例（該当ある場合のみ）

なし

〇平成３０年度の教育課程の内容（平成３０年度教育課程表を含めること）

別紙添付

〇具体的な研究事項・活動内容

ＨＯＰ：学びのレディネス形成

・毎週１時間、「総合的な学習の時間」において「学び方ガイドブック」を活用し、自らの夢・目標に向け、考えを整理してきた。エゴグラムやクレペリン検査を実施し、自らを客観的に捉えさせるとともに、グループワークによってコミュニケーション能力や課題解決能力の育成を行った。

ＳＴＥＰ：多様な力を育てる多様な学習

・主体的・対話的で深い学びとなる授業改善を推進するため、互見授業週間を実施した。

・２年次の「課題研究」は、各コースや学科単位で発表会を実施し、お互いの研究について、理解を深めた。また、各コースの代表が、校内プロジェクト発表会で全校に発表し、コース間連携に向け、研究内容の共有を行った。

＜インプット型連携＞

農業科の各コースが関連する企業や法人等で、現場見学会や先端技術講習会を実施し、それぞれの分野における最先端の知識・技術の習得に努めた。

＜トレーニング型連携＞

夏期休業中を中心にインターンシップ、デュアルシステムに延べ 16 名の生徒が、企業や団体に参加した。特に農業関係は 11 名となり、昨年の８名から増加した。

＜アウトプット型連携＞

青海祭（文化祭）、中学生体験入学等で農業科９コースの生徒が主体的に、自分たちの学びの成果を発表・ＰＲした。また、地域イベントに積極的に参加し、農産物などの販売を行った。

・アグリ・スタディ・ツアーを２回開催し、地域の子供や保護者に農業の魅力を伝えた。

・ＮＨＫのテレビ番組「旬感☆ゴトーチ！」に生出演し、生物工学科が「課題研究」で栽培に取り組んでいる「秋葉錦」についてテレビを通じ全国に紹介した。

＜中核的生徒（ＦＳ）＞

・第 29 回全国産業教育フェア新潟大会プレ大会で、本校ＳＰＨ事業の取組やＦＳの活動について発表した。

・ｄ－ｌａｂ2018（第 36 回開発教育全国研究集会）に参加し、公正で持続可能な社会づくりについて研修を行った。更にこの学びを還元すべく、ＦＳの生徒がファシリテーターになり、２学年の各クラスでワークショップを実践した。

・第 28 回全国産業教育フェア山口大会でポスター展示を行い、来場者に対し説明を行った。
・平成 30 年度国際理解教育プレゼンテーション・コンテストに参加し、ＳＰＨ事業のシンガポール研修で学んだ環境問題や本校のＳＤＧｓの取組について発表し、高校生部門で最優秀賞を受賞した。

ＪＵＭＰ：学びの集大成

【１学年】
・平成 31 年１月中に「総合実習」の授業において、コース担当者による面談を実施した。進路希望及びインターンシップやデュアルシステムの希望について詳しく聞き取りを行った。
・面談をとおし、将来の進路希望に関連した「課題研究」のテーマ設定ができるように指導した。
・面談の結果を校務サーバー内のファイルに入力し、担任との情報共有を行っている。

【２学年】
・平成 31 年１月から２月にかけて、コース担当者による面談を実施した。進路希望の確認及び進路決定への意識付けを行った。
・面談の結果を、校務サーバー内のファイルに入力し、担任との情報共有を行っている。

広報・普及・技術共有

・青海祭（文化祭）で学校説明会を実施し、中学生や保護者に対しＳＰＨ事業の説明を行った。
・ＨＳＪ通信（ＳＰＨ通信）を 20 回（通算 42 回）発行し、学校ＨＰに掲載した。
・学校だより「みのり」を毎月発行し、学校行事など本校の教育活動を紹介した。
・林野庁発行の「林野－Ｒｉｎｙａ－」６月号（№135）の「人材育成の現場から」のコーナーで、環境緑地科緑地工学コースの取組が紹介された。
・産業教育振興中央会が発行する「産業と教育」10 月号に本校ＳＰＨ事業の取組が紹介された。
・新潟県スーパーハイスクールネットワーク連携委員会で、本校のＳＰＨ事業や「課題研究」について発表した。
・７月 23 日（月）「主体的・対話的で深い学び」に関する内容で、職員研修会を本校で実施し、２学期からの授業実践につなげた。
・保護者への授業公開週間を授業互見週間と合わせて９月 25 日（水）～28 日（金）に実施した。
・２月７日（木）本校のＳＰＨ事業成果発表会を開催し、県内外から関係者 30 名が参加した。
・２月 15 日（金）外部講師を招き、教員対象に「主体的・対話的で深い学び」に関する評価について研修会を開催した。

５　研究の成果と課題

〇研究成果の普及方法

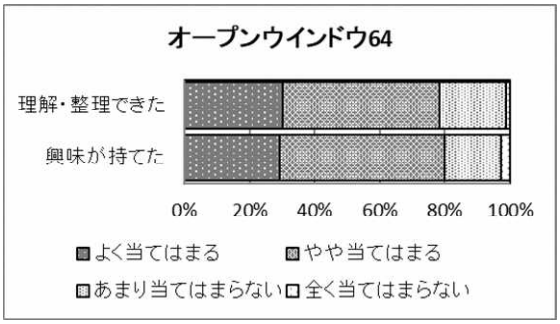
・世界一の苔玉づくり（草花コース）や炭焼きの研究（緑地工学コース）、古典菊の復活（バイテクコース）など、特色ある課題研究が新聞やテレビで紹介された。
・本校ホームページにＳＰＨサイトを新設し、取組状況と研究成果などを掲載した。
・中学校で食品製造コースがジャムづくりについて出前授業を開催したことで、中学校は修学旅行先でそのジャムとケーキを販売するなど、発展的な事業の広がりを見せている。
・平成 30 年度北信越地区高等学校長協会研究協議会において、本校のＳＰＨ事業の取組について発表した。
・研究成果発表会をはじめ、様々な機会に県内外から広く視察を受け入れ、ＳＰＨ事業の紹介や研究成果を紹介した。

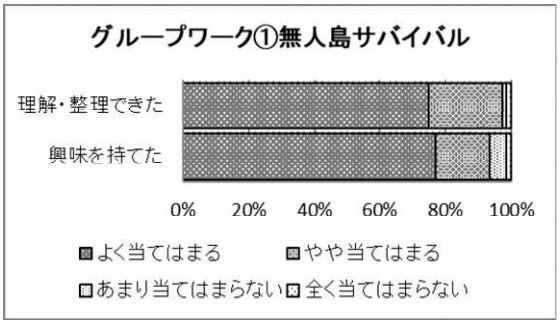
〇実施による効果とその評価

ＨＯＰ：学びのレディネス形成

ア）自ら目的・目標を設定して課題解決能力を発揮するための研究（課題解決能力）
・「学び方ガイドブック」の活用については、平成 29 年度のＳＰＨ企画評価会議委員からの指導もあり、クラス担任が過度な負担にならないように工夫・改善を行った。主に活動の記録や事後指導における結果・達成度の記入まとめ用として活用した。

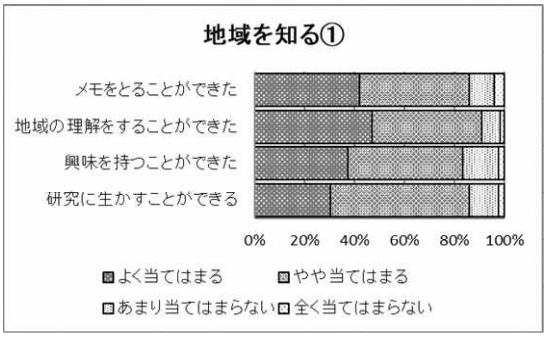
・実際の活動については、グループワークや体験学習を踏まえ、生徒の理解度を高めていくよう指導していくことが大切である。次の表は、ＨＯＰでの取り組んだ一部について理解度と興味度を示したグラフである。２つとも肯定的な感想が 80%程度を示し、特にオープンウィンドウ 64 は、昨年以上に興味を持っている生徒が多く、今後の様々な場面での活用に期待できる。

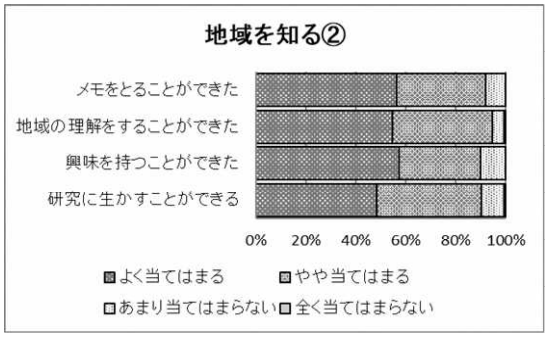




イ）多様な他者と協働的な取組を行うための研究　（協働性の力）

・アサーションやグループワークを繰り返し実施し、協働性の力の育成を図った。これにより、テーマ「地域を知る」による外部機関との連携では、２回目がより興味・関心が高くなる傾向が見られた。この地域学習は、次年度の「課題研究」につなげるための取組であり、テーマ設定や年間計画の作成に向け、効果的な活動となった。





ウ）自己教育力を育むための研究(自己教育力)

・１学年でエゴグラム分析を実施し、アンケート調査を行った。４段階の回答で評価を得た。（アンケート調査は回答を４段階とした。４「思う」、３「どちらかと言えば思う」、２「どちらかと言えば思わない」、１「思わない」とした。以下のアンケート調査も同様とする。）

「エゴグラム分析によって、行動を改善しようと思った」の項目は、評価３以上が 93.6%と高く、理想の自分に向け生徒自身が、自ら変化しようとする様子が見られた。

ＳＴＥＰ：多様な力を育てる多様な学習

（１）全教科で取り組む「主体的・対話的で深い学び」に関する研究

・新教育課程２年目となり、１学年・２学年共に、シラバスの様式を改定した。

・生徒や保護者が理解でき、授業の参考になるような項目として、授業内容のポイント（キーワード）や学習の到達目標、アドバイス、更に４観点の評価方法と配点（配分）を記入する欄を追加した。これを授業開きで示し、生徒に授業の内容を理解できるように指導した。

・生徒の授業評価アンケート調査を行い、調査項目「学校の授業や実習は分かりやすく、充実しているか」では、評価３以上が１年 91.3%、２年 90.1%、３年 82.2%と全学年 80%以上と高かった。これは、職員のＳＰＨ事業への意識の高まりや授業改善の成果が現れていると考えられる。

・学習指導目標の周知徹底とＡＬ20 の取組により、昨年度は「主体的・対話的で深い学び」を取り入れた科目は、20 科目であったが、今年度は 34 科目と 1.7 倍に上昇した。

（２）機能別に体系化した外部機関連携に関する研究

・農業科９コースにおいて延べ 14 か所で現場見学会を実施した。

・専門の職人や現場との関わりにより、職業人として不可欠な広い視野を持つこと（社会性）の大切さや、職員同士の連携や顧客とのコミュニケーション（人間性）の大切さを生徒に伝える

ことができた。また、教員と外部と連携を図ることで、生徒の意識の高まりにつながると実感できた。

・２、３年生に対しアンケート調査を実施した。「外部指導者からの指導により、最先端の専門知識・技術を学ぶことができた」の項目では、評価３以上が 78.4％と定量目標を達成した。

（３）ＦＳ（中核的生徒）に関する研究

・平成 29 年度にＦＳに任命された４名が第 29 回全国産業教育フェア新潟大会プレ大会、ｄ－１ａｂ2018（第 36 回開発教育全国研究集会）等に参加し、これまでのＳＰＨ事業での取組や学習した成果を発表する機会を得た。生徒は自信を持ち発表する様子が見られた。

・その顕著な効果の表れとして、平成 30 年度国際理解教育プレゼンテーション・コンテストへ参加し、高校生部門の最優秀賞を受賞した。

ＪＵＭＰ：学びの集大成

平成 30 年度の進路サポート（Ｔ－Ｔ）体制の検討・準備

・１年生は、早めにコース担当による面談を実施したため、進路に対する意識を喚起することができた。また、進路実現と「課題研究」の関連性を意識づけることができた。

・コース担当と担任がチームとなり、情報を共有し、生徒の進路実現にあたる意識を高めた。

広報・普及・技術共有

・文化祭や各種イベントでの農産物販売や発表等をとおして、生徒が学校のＰＲを行うとともに中学生体験入学において、各コースの成果発表を行うことで、地域や中学生に対し広報活動を行うことができた。

・ＳＰＨ事業の取組を情報発信するため「ＨＳＪ通信」として通算 42 号を発行した。

・教職員研修に対しての研修会を２回実施し、主に「主体的・対話的で深い学び」に関する授業展開の手法、評価について行った。研修会に参加した職員の 81.8％が授業改善に取り組んだ。

○実施上の問題点と今後の課題

ＨＯＰ：学びのレディネス形成

・課題解決能力・協働性の力・自己教育力の育成について、更に効率の良い指導を目指すために教員研修会を充実させ、スキルアップを図り、指導者側の統一した認識を図る必要がある。

・生徒のモチベーションを維持・向上させるため、ねらいの明確化と振り返りを丁寧に行う。

・学年の教員複数名でチームをつくり、取組が遅れがちな生徒を、サポートできる体制をつくる。

・「学び方ガイドブック」の取組内容を精選し、ＳＰＨ事業終了後も活用できるように検討する。

ＳＴＥＰ：多様な力を育てる多様な学習

・シラバスの活用方法や活用実態および生徒への効果を数値的に分析する必要がある。

・2019 年度は「主体的・対話的で深い学び」の実施調査結果を全教職員で共有し、一人一人が授業改善に取り組むようにする。また、本校の生徒が、特に足りないもの（学ぶ楽しさを知る、学ぶことの必要性を実感する等）を、全教職員で共通理解し、授業改善を促していく。

・ＦＳの活動がその他の生徒に波及した効果を数値的に算出する必要性がある。

ＪＵＭＰ：学びの集大成

・「課題研究」と進路実現を関連づけて考えている生徒は 13.4％と少数であることが分かった。面談等を充実させるなど、次年度の向上を図る必要がある。

・また、「課題研究」が進路決定に役立ったとする生徒も 28.5％と高くなかったが、テーマや内容だけではなく、「課題研究」への取り組み方（課題設定→考察→検証→結果の考察→表現）が進路実現には重要であることを生徒に理解させる。

広報・普及・技術共有

・更に普及を広めるために 2019 年度は、中学生体験入学、本校文化祭「青海祭」、アウトプット型外部連携事業等の一層の充実を図る。特に本県で開催される第 29 回全国産業教育フェア新潟大会は、全国から専門高校関係者や教育関係者、中学生や保護者等が集まる絶好の機会である。ＳＰＨ事業の取組と研究成果の発表の場として、有効に活用したいと考えている。